# みどりの ニュースレター

7
2012
No.230

市民の発信で持続可能な社会をつくる

## 特集：設立20周年 環境市民のこれまでとこれから

20周年
20th Anniversary

特定非営利活動法人
**環境市民**

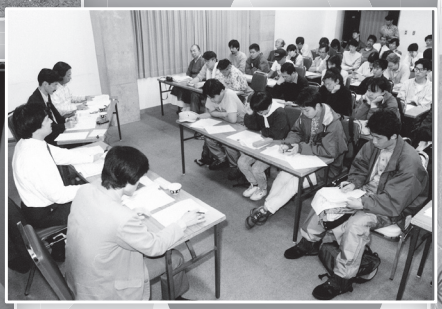
**¥200**
収益の一部は環境市民の活動資金として使わせていただきます。なお、会員には毎月無料配布しています。

このニュースレターはボランティアの手で折られ発送しています。

こどもエコキャンプ（東海）

スイスエコツアー

ラジオ収録風景


設立準備会総会

グリーンコンシューマーガイド

びわこ塾里山で遊ぼう（滋賀）

ニュースレター第１号発行

阪急電鉄エコトレイン三線同時発車

初期のころの野の塾

21世紀 地球を、地域を、生活を、持続可能な豊かさに

http://www.kankyoshimin.org/

Twitterやってます！
アカウントは kankyoshimin です。

# みどりのニュースレター

No.230 2012年7月号

**編集員が行く！** 02

New 環境展に愛の苦言
～土日開催でオープンな展示会を～

**特集：設立 20 周年**
**環境市民のこれまでとこれから** 03-09

**行事案内** 10

**とれたて　環境市民** 11-12

20 周年！ 環境市民！ 社員総会でつなぐこれまでとこれから／野の塾シリーズ　夏の京町家で、いにしえの知恵を科学の目で見る～電力に頼らない“涼”のとり方～

**地球のなかま** 13

第 50 回　ウナギ
―― 味は知っていても生態は知らない魚

**読者交流コーナー みどりのかわらばん** 14

**1/ 環境市民** 15

いつか、亀岡に福島の子どもたちを招待したい！／向井 弓子さん

**次号予告** みどりのニュースレター **No.231** 2012年8月号 現在編集中！

**特集：原発のない社会へパラダイムシフトしよう！（仮）**

6 月 17 日（日）の第 11 回通常社員総会の後に行ったセミナー「原発のない社会へパラダイムシフトしよう！」の内容をご報告します。

## 編集員が行く！

編集部のアンテナにかかった選りすぐりの
エコ情報を伝えます！

### No.37　New 環境展に愛の苦言
### ～土日開催でオープンな展示会を～

5月末に東京ビッグサイトで開催された「New環境展（同時開催：地球温暖化防止展）」に今年も行ってまいりました。例年通りBtoB（企業間取引）を対象としているので、開催は火～金の平日のみ。ブースでは、土木現場で使う大型重機やリサイクルプラント、オフィスや工場に導入するような太陽電池や壁面・屋上緑化システムなどがズラリ。一般家庭で導入するには少々敷居の高い製品が多く、実際、来場者の大半は業界関係者でした。賑やかで開放的な雰囲気に反し、どうも鎖国感があったことは否めません。とは言え、国内最大級の環境イベントだけあり、紹介される技術は世界に誇れる一級品ばかり。それだけに、土日も続けて開催すれば、学生や家族連れ、忙しくて平日に動けない社会人など、より多くの来場者が訪れ、興味喚起や環境知識の向上につなげられる気がします。

さて、多彩な出展の中でとりわけ興味深かったのが、下の写真にあるビオトープユニット。池の中ではメダカが泳いでいました。ある大学では、このユニットをつなげて構内に設置し、カルガモやトンボ、チョウなどを呼び込むことに成功したそうです。屋上緑化などへの応用が期待できますね。ただ、この手の展示は最近結構見かけますが、どれも必ず「水場」なのが気になるところ。野生の生きものさえいれば草地でも岩場でも何でもビオトープとなりえますので、もっと種類を豊富にしてほしいところです（水場でないと、中の生きものが逃げて展示会場に迷惑をかけるからだと思いますが……）。

ビオトープ

とまあ、文句ばかりのレビューになってしまいましたが、これも愛があるからこそ！ 期待を込めて、あえて苦言を呈させていただきました。次年度の更なる発展を楽しみにしています。

（文／ニュースレター編集部　鷹野 圭）

# 特集：設立20周年 環境市民のこれまでとこれから

環境市民は今年で20周年を迎えました。持続可能で豊かな社会を地域からつくっていくため、さまざまな活動をしてきました。今回の特集では、その内「豊かなライフスタイルを創造する」「経済をグリーンにする」「エコロジカルな次世代を育む」「世界の人々と協働する」の４つのミッションのもとに行った活動をふりかえります。
（ミッション「エコシティーをつくる」をもとに行った活動については2012年５月号をご覧ください）

## 豊かなライフスタイルを創造する

### グリーンコンシューマーを軸に活動

環境市民のライフスタイル系活動は、1992年設立当初（前身団体）よりグリーンコンシューマー活動を軸に、実践活動を展開してきました。グリーンコンシューマーとは、必要性を十分考慮したうえ、商品やサービスを購入する際には、環境に配慮した選択をする消費者のこと。グリーンコンシューマーを増やすため、商品に関する環境情報や、どの店が環境対策に熱心かなどを調べ、「グリーンコンシューマーガイド（買い物ガイド）」としてまとめ、市民に広める活動を、前身団体（ごみ問題市民会議）時代から取り組んできました。

### 「豊かなライフスタイル」の意味

さて、環境市民がライフスタイルに関わるミッションを「エコロジーなライフスタイルを創造する」とせず、「豊かなライフスタイルを創造する」としているのは、環境に配慮したライフスタイルとは本来豊かなもので、豊かなライフスタイルの提案・普及によって、資源やエネルギーの削減やごみ減量に貢献できると考えているからです。

近年増えているペットボトル飲料を例にあげると、なかでも特に増え方が著しいのが緑茶飲料です。飲んだ後の空き容器のリサイクルを呼びかける環境情報は多く見かけますが、大量リサイクルの推進ではなく、大切なのは発生抑制（元から減らす）。とは言え「ペットボトル飲料の利用を控えよう」のように、「がまん」「しんぼう」を求めても、反発する人が多くいることでしょう。

その点、緑茶は自分で煎れると、ペットボトル緑茶よりはるかにおいしいお茶を、安く飲むことができます。本当においしいものを知ってもらうことで、ペットボトルなどの使い捨て容器に頼った暮らしの見直しにつなげることができます。

### 本当に豊かな暮らしは環境負荷が少ない

本当に豊かな暮らしをめざすと、環境負荷が少なくなり、かつ出費も減る例は他にもあります。「旬の食材利用」もその一例です。交通分野に目を移しても、これまでの価値観では「高級車を所有している」ことは、「豊かさ」の代表的な指標でした。それよりも「自転車で元気にどこでも行ける」ことを「豊か」だと感じたならば、環境負荷が少なくなるだけでなく、健康面でもメリットがあります。

旅行でも、パックツアーのような「マスツーリズム」の中には、有名な観光地に行くことを目的化したものもありますが、旅のプロセスや旅先での人とのふれあいにこそ、旅の豊かさがあります。また、住まいや衣服など、「自分でリフォームする」ことで、愛着を持って長く使い続けることができます。そこには、従来の「多くのモノを所有し、次々買い替える」とは違った豊かさがあります。

### 大切なのはパラダイムシフト

もちろん、これらの行動実践には「ひと手間」が必要です。京町家でお茶の老舗販売店さんを招いた「おいしいお茶の煎れ方講座」や、自転車のメンテナンス講座や、住まいのエコリフォーム講座などを開催や、講座だけでなく、京都西山山麓に、農地を借りて自然農法などを実践した「エコファーム」の運営、自転車ツアーやエコツアーなども実践してきました。

これら衣食住と移動など、ライフスタイルの様々な分野・領域で、上記のような活動を企画実践することで、「手間＝不便」ではなく、むしろ「手間」のなかに本当の豊かさがあることを感じてもらい、豊かさのパラダイムシフト（価値観の転換）を促す活動を、多くのボランティアたちと企画・実践してきました。

このような活動は、1998年に設立された環境市民滋賀や、1999年に設立された環境市民東海でも、数多く

企画実践されてきました。

## 地域や社会への働きかけ

一方、講座やイベントは、開催できる地域や参加者数に限りがあります。より多くの人に考え方や情報を伝える手段の一つに、冊子（ガイドブック）の作成・発行があります。はじめに紹介した「グリーンコンシューマーガイド」の作成は、市民・消費者の選択を通じて、流通事業者（お店）の品揃えや、生産者のモノづくりに影響を与えることを目的に作成しましたが、より多くの人に手に取って、このような環境行動に注目してもらう必要があります。そのため、他のまちの団体が同様のガイドを作成する際の支援なども取り組んできました。

このような活動は、各地で市民団体と協力して、全国で売り上げ上位のスーパーマーケットや生協・コンビニなど流通小売店を対象に、本社レベルでの環境対策等を調べた「全国版グリーンコンシューマーガイド」を作成に発展しました。1996年には「地球にやさしい買い物ガイド」として講談社から、1999年には「グリーンコンシューマーになる買い物ガイド」と題して小学館から、それぞれ発行しました。全国の市民団体との協力は、グリーンコンシューマー全国ネットワークの設立へと発展しました。同じく1999年には、京都市内の全スーパー・生協（255店）を対象にした「グリーンコンシューマーガイド1999京都」を作成し発行しました（自主出版）。

これらの成果は、企業や行政機関のグリーン購入を推進する活動にも影響を与え、1996年のグリーン購入ネットワーク（事務局・東京）の設立や、2000年の「グリーン購入法（国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律）」などの成果を生み出しています。こういった活動等により、環境配慮製品は、質・量ともに、環境市民が設立された20年前とは比べ物にならないほど大きく前進しました。

## 誰でも参加できる活動を数多く企画実践

1997年から2000年にかけては、環境市民の会員が最も多かった頃です。1997年京都市内で開催された「気候変動枠組条約第３回締約国会議（COP3、以下COP3）」は、地球温暖化をはじめ、環境問題の深刻さを多くの人に知らしめました。この当時、地球温暖化防止をはじめ、環境問題に総合的に取り組んでいた環境NGOはごく限られた存在で、京エコロジーセンターのように官設の環境学習センターもほとんどない状況でした。そのため、環境市民に寄せられる期待も大きなものがありました。

さらに、先ほど紹介した京都版グリーンコンシューマーガイドの作成が、COP3の翌1998年に最盛期を迎え、店舗調査には計150人のボランティアが参加してくれました。他の活動やプロジェクトも含め、市民・学生向けに、誰でも参加できる活動を数多く企画実践したことが、多くの支持者を得ることにつながったと思います。

## 地域活動の実践成果を、出版物に

出版物の作成・発行では、2000年、「住まいのエコリフォーム」をテーマにした市民向け連続講座の成果を活かした冊子を発行しました（2004年には、「住まいのエコリフォーム2」を発行しています。ともに自主出版）。2005年には、「京都自転車マップ」の「まちなか版」を、翌2006年には「郊外版」を発行しました（せせらぎ出版）。マップの作成にあたって、多くのボランティアとともに、京都市内および郊外の主要路を実走し、危険箇所、トイレ、自転車屋の位置などを調べました。また、自転車ツアーのモデル路線を紹介した小冊子も付けました。京都自転車マップは、2010年にもLLP自転車ライフプロジェクトとの協働で作成・発行されました（西日本出版社）。

2006年には、京都のまちに培われた先人の知恵を、季節ごとに現在に活かすことを提案した「だいすき京都 環境市民の遊び方 暮らし方」を発行しました。この本は、グリーンコンシューマーガイド京都版の発展型としての位置づけもあり、化学的な添加物の排除や原材料への明確な方針を持っている店や商品なども紹介しました。

このような地域活動の実践成果をまとめ、出版を通じてライフスタイル提案をしてきました。

## 今後のライフスタイル系活動

今後の環境市民のライフスタイルに関わる活動ですが、設立当初から力を入れてきたグリーンコンシューマー活動を、現在の商品情報や流通事情をもとに再構築することがあげられます。環境配慮製品の選択で、消費電力やガソリンの消費抑制、ごみ減量などにつながり、地球温暖化防止に貢献できることは知られてきましたが、生産地の環境保全を通じて、生物多様性の維持・発展に貢献できることは、まだあまり知られていません。これらの情報を収集し、多くの市民が参加できる活動として構築していきます。

また、昨年度から取り組んでいるグリーンウォッシュ活動は、環境広告のうち、まぎらわしい表現や実際の効果より誇大に表現した表現などに対して、実効性のあるルールを設けようというもので、海外調査や学識者を交えて議論を進めています。この活動では、一般市民から「この広告おかしい」と思う情報を提供してくれる「グリーンウォッシュウォッチャー」を募集するなど、市民参加型で進めていくことにしています。

（文／本会事務局長　堀 孝弘）

## 経済をグリーンにする

### 持続可能な社会の基盤の一つ

今年、6月20日～22日に開催された「国連持続可能な開発会議（リオ＋20）」のメインテーマがグリーン経済の移行でしたが、環境市民は、20年前の創設以来、そのミッションとして「経済をグリーンにする」ことを掲げてきました。それは、1992年に開催された「環境と開発に関する国連会議（地球サミット）」で「持続可能な開発・発展」が世界の最大のテーマとして提唱され、持続可能な社会の基盤として環境、経済、社会の3要素が必須とされたことを受けたものでした。

環境市民のこのミッションに基づく活動としては、ミッション「豊かなライフスタイルを創造する」で紹介したグリーンコンシューマー活動との連関があります。グリーンコンシューマー活動は直接には消費者に向けたものですが、同時に販売者、製造者である企業が環境を大切にした企業活動、商品展開を促すことを目的としています。90年代には京都版や全国版ガイド作成時に多くの流通小売店・企業を訪問し、その中で情報や意見の交流をすすめました。また、ガイド作成後に事業者と意見交流会を開催し、環境配慮商品の展開や企業の環境活動などに関して様々な意見交換を行いました。

### デパートやスーパーでキャンペーンを実施

このようなグリーンコンシューマー活動をベースに、「経済をグリーンにする」活動が具体化していきました。95、6年には大丸京都店に「アースデー」企画を提案し、簡易包装店内キャンペーンや環境写真の店内掲示などを実施しました。そして97年のCOP3に向けてジャスコ（現イオン）と協働で地球温暖化防止キャンペーンを実施しました。ジャスコの近畿地区にある大型15店舗（当時）を金土日の3日間ずつほぼ毎週のようにキャラバンしてまわりました。各店にある広場を用いて地球温暖化防止クイズパネルの展開、自転車発電の実体験、来店した方への環境メッセージ募集、そして店内でのグリーン商品探しゲームなどを行いました。まだ地球温暖化への一般的関心が高くなかった時期のキャンペーンとしては大きな成果を上げました。

99年には大阪府、ジャスコ、ダイエー、マイカル（当時）等とともに「グリーンな買い物」キャンペーンを実施、環境配慮製品を独自の基準で選出し、共通する店頭表示を実施しその効果を検証しました。さらに2003年からは、京都の多様な団体、事業者、府、市とともに実行委員会を作り、家電製品の「省エネ製品グリーンコンシューマーキャンペーン」を展開し、2005年には20都府県に広がりました。この活動から現在の家電製品省エネ性能表示ラベルが生まれています。

ジャスコと協働した地球温暖化防止キャンペーン

### グリーン購入ネットワーク発足

このような活動とともにグリーン購入ネットワークに96年の創設期から参画、同ネットワークの理事、代表理事として、様々な活動の発展に貢献しました。また2004年に京都府、市、志ある事業者とともに京都グリーン購入ネットワークを創設し、環境市民が事務局を担っています。このようなグリーンコンシューマーを基盤とした活動への評価として、2004年に環境大臣賞・グリーン購入大賞を受賞し、2005年度の国の環境白書に「市民団体の取組が国レベルのしくみづくりに寄与した事例」として紹介されました。

2005年度からは「環境マイスター研修・認定制度」を継続実施しています。販売者が購入者に適切な環境

情報を伝えることにより、より環境に対応した商品・サービスの普及をめざすものです。環境市民が企画考案し2005年に内閣府の先駆的省資源・省エネルギー実践活動のパイロット事業として山形県（自動車販売、家電販売）、和歌山県（家電販売）で県、事業者組合、県地球温暖化防止活動推進センターと連携して開始しました。

その後、自動車販売者を対象とした環境マイスター事業は、事業者組合の積極性もあって、現在、山形、東京、神奈川、滋賀、長崎、熊本で継続実施され、今年度からは秋田でも実施されます。またサッシ・ガラスの販売・施工事業者に対しては、事業者組合と協働で全国６ブロック及び山形県で実施しました。長崎県では環境カウンセリング協会長崎がコーディネートし、自動車だけでなく、住宅建築、家電販売を対象に実施中です。このような展開により、これまで2400人を超える環境マイスターを認定しています。

## 市民目線でCSRを評価

この10年ほどの間にCSR（企業の社会的責任）という概念と、それに基づく企業の社会的活動に関心が高まってきました。「良い企業」という評価の軸が、経営が好成績だけの軸ではなく、環境をはじめとした様々な取り組みの軸で測られだしたと言えます。企業のCSR活動をより本格化させるためには、そのCSR活動を市民の目線でわかりやすく評価し、それが商品サービスの購入、投資、就職の選択の大きな要素として入ってくる必要があります。

このような評価と行動はグリーンな経済をすすめるために必要であり、「日本版SHOPPING for a better world（より良い世界のための買い物）」作成プロジェクトとしてすすめています。これは企業の環境、人権、労働者福利、社会貢献活動等のCSR活動を調査し、結果を評価（レイティング）し、分かりやすい記事とともにまとめて、本やウェブサイトで多くの人々に提供するものです。この数年間、他の分野のNPOとともに「CSRを応援するNPO・市民ネットワーク」をつくり、その準備をすすめてきましたが、今年度後半にいよいよ第1弾を作成し、その後も継続的に発展させていく予定です。

## グリーンウォッシュを防ぐ

昨年度からスタートさせたのが「グリーンウォッシュを防ぐプロジェクト」です。グリーンウォッシュとは、商品・サービスの広告、表示において、環境面のアピールが誇大、事実に基づかない、あいまいな表現でより優れたものと誤解を与える、などの行為をいいます。グリーンウォッシュを野放しにしていると、より環境負荷の少ない商品・サービスに対する消費者の信頼度が低くなり、その結果、真剣に努力している企業も大きなマイナスを被ることになります。海外では、グリーンウォッシュを防ぐ社会的な仕組み作りがなされている国が増えてきました。しかし日本では、環境省が環境表示ガイドラインを作成し公正取引委員会が留意事項を示していますが、社会的規範として用いる仕組みづくりがなされていません。そのため、現在日本では、多くのグリーンウォッシュが氾濫する状況になっています。このような状況を大きく変えるため、2013年度にはグリーンウォッシュを防ぐ社会的な仕組みを創るプロジェクトをすすめていきます。

## 電鉄会社との協働事業

97年の京都で行われたCOP3に合わせて、実現したのが叡山電鉄の「エコモーション号」。2両1編成の新型車両を、環境をテーマにした外装にデザインし、車内広告の替わりに環境をアピールするポスター等にして、公共交通の積極利用を呼びかけるキャンペーン列車で、1995年から8年間にわたり走行しました（現在は同趣旨で「こもれび」号として運行中）。

このエコモーションのコンセプトを受け継ぎ、より大きな社会的影響を及ぼしたのが阪急電車のエコトレイン号。８両３編成が８か月にわたり、車体デザインを、環境をアピールするものにし、車内広告を全て地球温暖化防止を訴える様々なポスター等に換えてアピールしました。延べ800万人が乗車し、乗客にも大変好評を博しました（第11回グリーン購入大賞 環境大臣賞を受賞）。環境市民は企画監修としてエコトレイン号の取り組みをすすめました。

阪急電車エコトレイン

また事業者向けに「環境問題と経済活動についての研修会～流通業界を中心に～」（1996年）と「食品のエコラベル」研修（1997、98年度）にイシダアイテス（株）と共同実施、「持続可能型環境経営セミナー」

（2004、2005年度）の開催なども実施しました。さらに、現在、エコオフィスをすすめるプロジェクトを（株）ウエダ本社とすすめています。また住宅建築にかかわる事業者を対象としたエコ・リフォームの研修認定システムも構築中です。

このように環境市民の「経済をグリーン」にする活動は、個別企業との協働、事業者団体との協働、社会制度やしくみの提案実施と三つの形で進めていますが、あくまでも環境市民のビジョン、ミッションを実現することに結びつく活動であることを大切にしています。　（文／本会代表理事　枚本 育生）

## エコロジーな次世代を育む

### 環境教育リーダー養成講座

環境市民が設立された1990年代の始め、環境教育という言葉も考え方も知られていませんでした。「環境教育を広めるには、仲間が必要」とのことで、京都周辺の環境教育実践者が集って実行委員会を設け、1995年から自主企画講座として「環境教育リーダー養成講座」を開催しました。

その後、一時中断の後、2002年京エコロジーセンターの開所後、同センター主催、環境市民企画・運営で再開され、現在に至っています。再開後だけでも2012年で10回を数え、多くの環境教育リーダーの育成に寄与してきました。

この環境教育リーダー養成講座には、環境市民の環境教育の考えが凝縮されています。扱う分野は、自然の保全、まちづくり、暮らしの見直しから、地球環境問題まで多岐に及び、それらのつながりを意識した内容になっています。参加者に取り組んでもらう内容も、気づきの引き出し、人とのコミュニケーション演習、グループでの合意形成、プレゼンツールの作成や発表を含みます。環境問題を総合的にとらえ、各分野の実践活動を、講師が自身の経験として紹介できる講座は、全国でも特色のあるものと言えます。

あわせて、京エコロジーセンターの開設に向けた構想調査や、市民向け展示の企画・提案も環境教育活動のひとつと考えられます（2001～2002年）。同センターの開所後、多くの市民や児童がこの施設で環境問題について学んでいます。

### COP3を契機とした環境教育活動

環境市民が取り組んだ環境教育活動で、特徴のあるものとして、1997年に京都で開催されたCOP3への市民の関心を高めることを目的に、ジャスコ西日本カンパニー（当時）と協働で実施した店頭キャンペーンがあげられます。スーパーには環境問題に関心のない人も買い物に訪れます。このキャンペーンは、近畿地方の同社大型店15店の店頭で実施し、一般客を対象に、クイズやゲームを通じて地球温暖化問題への関心を高めることに寄与しました。

COP3をきっかけに生まれた活動として、エコファイターショーもあげられます。国際会議場の前で、外国人記者を前に英語のフリップをつけて、会議で実効性のある議定書の採択を促す行動などもしました。この会議の後も、子ども向けの環境啓発寸劇として、2010年まで幼稚園・保育園や、スーパー店頭などで幾度となく実演しました。

また、京都会議の前後には、「STOP地球温暖化カルタ」の作成など、環境教育教材の開発にも力を入れました。1999年には描き込み絵本「みどりのえかきやさん」を作成しました。

### 人材養成講座のコーディネート

1997年には、京都市、大阪府豊中市、箕面市、岐阜県多治見市などで、ごみ減量や地球環境問題全般を学ぶ連続講座のコーディネート（企画運営）の一括依頼を受けました。以降、多くの自治体等から同様の依頼を受けています。

テーマも、市民参画のまちづくりを考える「エコシティ連続講座」のコーディネートを、1998年に福井県武生市（現越前市）から依頼されたのをはじめ、京都府長岡京市、滋賀県草津市、新旭町（現高島市）、大阪府島本町などから、まちづくりや地域住民とすすめる環境調査など、様々な内容の委託を受けています。

また、1998年以降、独立行政法人環境再生保全機構（旧：環境事業団）からほぼ毎年、環境NPO組織マネジメントなどを受託し実施しています。これは同機構から毎年違うテーマで講座の企画募集があり、応募提案の中から審査採用されるものです。2011年度は、環境市民が提案した「環境NGO・NPOレベルアップ研修『社会を変えるリーダーになろう！』」と、「環境NGO・NPO活動推進・組織運営講座『社会を変える、社会に伝わる、NGOの広報力アップ講座』」の

２講座が採用され、京都市内および熊本市内でそれぞれ開催しました。

## 地球温暖化防止活動推進員養成講座

環境市民が地球温暖化防止活動推進員養成講座の企画運営に携わったのは、2000年の奈良県が初めてです。その後３年連続で受託し、計100人以上の推進員養成に携わりました。それまで、他県で行われていた推進員養成講座の中には、温暖化のメカニズムや国際条約の内容など、数回のレクチャー（座学）を受講して「修了」としたものも見られましたが、環境市民が企画した養成講座は、全５回の連続講座で、各回座学とワークショップを織りまぜ、聴講だけでなく、受講者の行動実践に結びつく内容として実施しました。その成果は１年目の講座終了後に、奈良ストップ温暖化の会（略称NASO）の結成に結実しました。NASOは、その後NPO化を経て、2006年には奈良県から地球温暖化防止活動推進センターの指定を受け、現在に至っています。

同様の講座は、その後、岡山県、和歌山県、佐賀県、富山県、山口県などから受託・実施しました。

## 学校現場での環境教育・環境学習

2001年には、スウェーデンの学校現場に環境教育視察を実施しました（WWF日興グリーンインベスターズ基金助成事業）。同国におけるグリーンフラッグの運営団体や取得校を視察し、帰国後の2002年1月視察の成果を活かし「学校の先生向け環境教育セミナー」を開催しました。

その後、2002年～2004年にかけて、大阪府農林水産部循環型社会推進室から「大阪府環境学習人材支援事業」として大阪府内小学校での環境学習授業を委託（複数の団体での共同実施）するなど、それまでなかなか実現できなかった学校現場での環境学習が実現するようになりました。これらは、京エコロジーセンターのような中間支援組織が設立され、それらの仲立ちによって、このような機会が増えたといえます。

## こども向けイベントや展示企画の実施

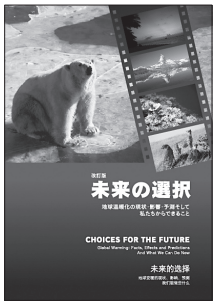
2004年に岡山県で開催された「岡山こどもアース・フェスタ」では、イベント全体の企画を含めて環境市民が実施しました。このなかで「エコファイターショー」をはじめ、グリーンコンシューマーをテーマにした「買い物ゲーム」、ごみ減量や地球温暖化防止をテーマにしたワークショップなど、これまでの様々な活動成果を活かしました。

2007年には大阪府立大型児童館ビッグバン「地球にeco と展」における展示企画とワークショップの実施、2008年には、姫路リバーシティにおける環境月間展示などを実施しました。

## エコ地蔵盆と環境教育DVD「未来の選択」

京都市および周辺には、地域で子どもたちを守り育てることを目的とした「地蔵盆」と呼ばれる行事があります。ここにエコロジーの発想を採り入れてもらおうという活動が「エコ地蔵盆」です（2007年～）。食品添加物が入っていない食べ物を選ぶ、地域のお店で購入する、おもちゃもすぐに飽きるものでなく、長く使えるものを選ぶなどの意識を持ってもらうことで、子どもたちだけでなく、地域住民への環境教育にもつながります。実践成果を冊子にまとめた「やってみようエコ地蔵盆」も、2011年度には３号を発行しています。

2007年度には、環境教育DVD「未来の選択」を作成しました。これは30分で地球温暖化の状況と私たちができる対策をわかりやすくまとめたもので、松下電器産業株式会社（現パナソニック株式会社）からの寄付によって実現しました。このように、講座や地域実践活動だけでなく、映像教材の作成にも取り組んできました。




## 最近の成果と今後について

環境市民は、特定の分野だけでなく、環境問題を総合的にとらえた活動を実践しています。その経験を環境教育に活かせることは、環境市民の強みです。その強みが、2011年度、兵庫県加西市西在田小学校でのグリーンフラッグ取得支援に活かされました。グリーンフラッグは環境教育に取り組む学校等教育機関に対する国際的な認証制度ですが、日本の小学校では初めての認証取得です。

今後も、これらの成果・経験を活かし、日本国内でのグリーンフラッグ取得をはじめ、環境教育の進展に貢献したいと考えます。

（文／本会事務局長　堀 孝弘）

# 世界の人々やNGOと協働する

環境市民の活動現場は国内の地域ですが、環境問題は地球規模であり、その根本的な解決には、地域に基盤をおきながらも世界の人々やNGOと情報交流、活動の相互協力、そして人の交流をしていくことは重要です。

環境市民創設まもなく、理論物理学者でかつエコロジー思想で有名なフリッチョフ・カプラ氏（著書『タオ自然学』など）、国際消費者連盟の元会長でアジアの消費者運動のリーダーであるアンワ・ファザール氏、各々を招き公開セミナーを開催しました。

94年には、最初の「ドイツ・スイス・エコロジー視察旅行」を公開募集で実施しました。この視察では、エコシティづくり、グリーンコンシューマー活動、近自然河川改修、エコツーリズムについて現地で活動されている方から学ぶことができ、その後の活動の大きな資産となりました。

ドイツを中心としたヨーロッパへの訪問視察活動は、その後も継続的に続き、初期はグリーンコンシューマーをテーマに、90代後半からは環境首都、エコシティをテーマに行っています。そして、視察で得た情報をできるだけ多くの人々に共有化するため、ニュースレターやセミナーでの報告の他にも、新聞でのリポート連載、雑誌、学会誌への執筆などを行っています。

また視察交流した先の自治体、NPOの日本への訪問もすすめ、ローカル・アジェンダ21と化石燃料ゼロ宣言で有名なスウェーデンのヴェクショー市（市長、アジェンダ21コーディネーター）、ドイツの環境首都になったハム市、エッカーンフェルデ市の政策担当者及びドイツの環境首都コンテスト主催NGO「ドイツ環境支援」のコーディネーターを招き、各々京都及び日本各地でセミナーを開催しました。ハム市、エッカーンフェルデ市との交流は、継続的に行っており環境市民との信頼関係は高いものになっています。

環境首都のテーマでは、韓国の大統領直属諮問機関である韓国持続可能発展委員会の使節団が2度にわたって環境市民を訪問され交流しています。また韓国の水原市職員の訪問団にもレクチャーしました。

ドイツ環境首都セミナー

水原市市長は元ローカル・アジェンダ組織の代表だったこともある方で、今後の協働プロジェクトの展開可能性も見えてくるよい機会となりました。さらに、環境庁（当時）が支援しソウル市で2001年に開催された日中韓ローカル・アジェンダ21フォーラムには日本のNGOを代表して参加しました。

中国の北京市にある日中友好環境保全センターで設置が進められていた「環境技術情報プラザ」への助言のため北京市に赴きました。この施設は中国初のエコロジーセンターと言えるもので、京都市の京（みやこ）エコロジーセンター創設時に大きな役割を果たしたNGOの経験を伝えるとともに、中国の環境NGOである「自然之友」「天下渓」と活動内容の交流も行いました。この訪問は、JICAからの専門家派遣依頼に基づくものです。JICAからはこの他にも、日本に研修に来られた世界各地の自治体職員向けにエコツーリズムや環境のまちづくり研修講師の依頼がありました。またこの数年は毎年のように韓国、中国の学生や市民団体が環境市民を訪問され情報交換をしています。

パナソニックの協力を得て作成した気候変動防止の研修DVD「未来の選択」は改定に合わせて英語、中国語も入った３か国版も作成しました。この３か国版は、パナソニックの海外従業員の研修に使われるほか、他の企業でも用いられています。また昨年は原発大事故を受けての日独市民チャリティーコンサート「被災地支援・子供達の未来に原発のない世界を」やスイス人ジャーナリスト、スーザン・ボースさんの取材にも協力をしました（ドイツ語で「福島からのメッセージ」として発刊され環境市民の活動も紹介されている）。

ミッション「経済をクリーン化する」の活動である「グリーンウォッシュをなくそう！」プロジェクトで、英国、米国、オーストラリアの広告関係の組織や企業、消費者団体、環境NGOとの情報交換を行いました。今後、消費者団体、環境NGOとの情報交換を継続し国際的なグリーンウォッシュの情報ネットワークを構築したいと考えています。また、2006年に島嶼国に太陽光発電を広めていくプロジェクトを企画しました。ただ対象国との情報・意見交流がまだ難しい点があり、今後、企画や対象地域の見直しをして具体化する必要があると考えています。

（文／本会代表理事　枚本 育生）

# 行事案内

京 環境市民　東 環境市民東海　滋 環境市民滋賀

## 京 1 Dayボランティアデー

毎月エコな話題をおしゃべりしながら会報誌みどりのニュースレター発送作業をしています。どなたでも参加できます。環境市民の事務所ってどんなところ？どんな活動をしているの？などいろんな質問にもお答えします。新しい事務所を見てみたい、と思う方もぜひお気軽にご参加ください。

＊とき：7月31日（火）午後2:00から7:00頃まで
＊ところ：環境市民京都事務所

## 京 第８回 ぬいカフェ♪「Myお弁当袋を作ろう」

第７回では、はぎれを使って自分のお箸にピッタリのMy箸袋を作りました。次は「Myお弁当袋」に挑戦です。単体でも箸袋と色柄を合わせても、お弁当の時間がますます楽しくなることまちがいなし！　初心者にも針の持ち方から丁寧に指導します。体にうれしい手作りのおやつつき♪

＊とき：7月20日（金）午後1:00から4:00まで
＊ところ：環境市民京都事務所
＊参加費：500円
＊持ち物：
・裁縫道具（針、指ぬき、はさみ、チャコペンなど）。ない方には一部お貸しできます。・お弁当袋に入れたいお弁当箱。・お弁当袋に使いたい布（40～50cm四方程度。ハンカチなどでもOK。お弁当箱が大きい人はそれなりに大きいもの）と糸。・巾着用の紐（太さ：7mm程度/長さ：上から見てお弁当箱を三周以上）。
・他に作りたいものや直したいものがある人は、その材料と現物。※足りない材料はご用意できます。なるべく事前にお知らせください。（材料費別途必要）
＊定員：８人（先着順）　＊申込み：必要
＊申込み締切：7月18日（水）

## 京 いまからワタシも！サイクリスト講座第３回 眼からウロコ！自転車が使いやすい街ってどんな街？

自転車を買いたい、買ったけれどもて余し気味のアナタ！レクチャーあり、実走あり、ツアーあり、修了すれば自転車ツウになれること間違いナシ！　連続講座の第３回はヨーロッパの自転車事情視察から帰ったばかりの藤本芳一さんの報告と共に、自転車の利用環境について皆さんで考えます。

＊とき：8月5日（日）午後1:30から4:30
＊ところ：東山いきいき市民活動センター１階　第４会議室　京都市東山区花見小路通古門前上ル巽町450（地下鉄／京阪三条駅の北側から若松通を東へ徒歩３分）
＊講師：藤本 芳一さん（LLP自転車ライフプロジェクト）
＊参加費：1,000円（第３回のみの参加費）
＊定員：20人（先着順）
＊申込み：必要
※以降の予定
第４回　9月9日（日）　日帰りツアー「琵琶湖へ！」
第５回　10月7日（日）　ワークショップ「私が見つけた自転車ライフ」
＊問合せ：環境市民
＊主催：スローモビリティライフプロジェクト実行委員会（環境市民野の塾プロジェクトおよび自転車チームちゃり民、LLP自転車ライフプロジェクトなど）
＊協賛：京のアジェンダ21フォーラム

## 滋 春日山公園自然観察会

春日山公園において、ビオトープの池を中心として、自然観察会を行います。春日山公園は、ビオトープの池のほか、近隣の水田もあり、豊かな自然が保存されている公園です。

＊とき：7月28日（土）午前10:00から12:00
＊ところ：大津市堅田春日山公園入り口に10:00集合（春日山公園は、JR堅田駅より西約500ｍ）
＊持ち物：軽装、手ぬぐい、軍手、雨具
＊申込み：環境市民滋賀事務所　＊締切：7月21日（土）

### 新入会員インタビュー

**甲斐沼 収さん**
**（兵庫県在住）5月7日入会**

エコメイト※を経て、より深く環境問題を探るためにこのたび入会。環境問題を考えるにあたり、私としては「答えは一つではない」と思っています。例えばエネルギー問題にしても、皆が問題意識を持って考える中で、意見が食い違うのは当然のこと。その時に「一つにまとめる」のではなく、より広い視野に立って物事を考えていきたいですね。

※ 京都市の環境学習と環境保全活動の拠点「京エコロジーセンター」にて環境活動を行うボランティア

### ミーティング（いずれも京都事務所で行います）

**自然住宅プロジェクト**　7月3日（水）午後2:00から4:00まで
**ラジオチーム**　7月4日（水）午後3:00から5:00まで、7月25日（水）午後4:00から6:00まで

### 新入会／寄付（5月1日から6月10日まで）

〈新入会〉甲斐沼 収／久保田 彰／丸山 治彦

### 今月のありがとう

お力を貸してくださった方々に、感謝をこめて―。

安食 涼子／大垣 秀樹／甲斐沼 収／久保田 浩／栗田 有紀

# とれたて！ 環境市民

環境市民の今、そしてこれからの活動をお知らせします

## 20周年！環境市民！社員総会でつなぐこれまでとこれから

### 第1部　第11回通常社員総会 ～過去と未来をつなぐ今～

6月17日（日）、午後1:30より、京都市伏見区にある京エコロジーセンターで環境市民の第11回通常社員総会が開かれました。

昨日までの大雨が嘘のように梅雨の合間に訪れた快晴の中、太陽も環境市民の20周年を祝福してくれているような一日でした。

まず行われたのは、2011年度の報告。環境市民のスタッフが代わる代わるスライドを用い、参加者に向けてマイクを握ります。環境市民の五つのミッションについての京都、東海、滋賀の各事務所からの事業報告に加え、広報活動や東日本大震災および福島第一原発事故に対しての活動の報告、そして2011年度の収支報告がありました。これらの決議は賛成多数により、承認をされました。

加えて、2012年度事業報告、収支予算書の報告もされました。これらの文書は環境市民のウェブサイトで公開しますので、ご覧ください。

最後に、参加者から「現在の環境市民のスタッフは忙しすぎてボランティアコーディネートを十分にできない状態にあると思われる。自主事業で資金を獲得していく方法を考えるべきではないか」という意見があった。

これに対し「今後10年で自主事業比率を高め、会員を増やすことによって誰もが参加できる活動を増やしていきたい」と枚本代表は語った。

その言葉に前向きな頼もしさを覚えつつも、枚本代表に頼るのではなく、参加者の一人として、環境市民を楽しいところにしていきたいと思います。

### 第2部　20周年記念セミナー ～未来に描く豊かな社会～

続いて午後3:00からは「祝！環境市民＆リオサミット20周年記念セミナー　原発のない社会へパラダイムシフトしよう！」が開催されました。本会代表理事の枚本 育生と、本会理事であり京都大学大学院経済学研究科教授の植田　和弘先生による対談形式のセミナーで、福島第一原発事故以降の日本のエネルギー政策のあり方から、豊かな社会へのパラダイムシフトまで興味深いテーマで論壇していただきました。

会場いっぱいの参加者

会場を埋めつくす、約70人もの観客が訪れたこちらのセミナーについては、来月号の特集で詳しくご紹介します。

### 第3部 交流会 ～歩んだ歴史と変わらぬ絆～

セミナー終了後には同センター内にあるエコ厨房で交流会が行われました。滋賀からおこしいただいた「アースキッチンたまや」さんの、野菜だけを使ったベジ料理の数々を食べながら参加者で交流を深めました。こうしたお料理一つにも配慮を欠かさないのが、環境市民らしさであり、これまで活動が持続している要因の一つだと思います。

交流会でのお食事

そして締めくくりには、この20年、撮り溜めてきた写真をスライドに映しながら楽しく振り返りました。いまやお馴染みのシンボルマークの誕生話や、エコシティ研究会や住宅研究会の立ち上げ、COP3での盛り上がりなど、環境市民の準備段階から現在にいたるまで、様々な活動が、多くの方々によって支えられてきたことをひしひしと感じます。

本日お会いした皆さんとは、ぜひ21周年を迎える場で再び相見えたいとそう思う一日でした。

（文／ニュースレター編集部　石田 浩基）

## 野の塾シリーズ　夏の京町家で、いにしえの知恵を科学の目で見る
## ～電力に頼らない“涼”のとり方～

昨年3月11日の東日本大震災と原発事故以降、いかに低エネルギーの暮らしを実現するかが国民的課題となっています。しかし、我慢だけでは長続きしません。私たちのライフスタイルやエネルギー供給の在り方を転換し、電力に頼らない楽しみ方をみつけることが必要です。生き物の魅力とエネルギーの未来を感じよう！　野の塾（里山・町家編）では、みなさんと一緒に、身近な生活の中でそのヒントを見つけていきます。夏を目前に迎えた今回のテーマは、電力に頼らない“涼”のとり方です。

### 町家との出合い

京都の町にも高いビルやマンションが増えてきました。しかし、小路を歩けば、木造の趣深い町家との出合いが待っています。格子戸から漏れる家の中の灯りがとても温かく感じられ、コンクリートの街を歩き疲れた体を、ふっと癒してくれるような町家の優しさ。住まいとして、カフェとして、町の寄り合い場として、町家は私たちの生活に溶け込み、時代を超えて息づいているのです。

### 釜座町町家での発見

6月9日（土）。「電力に頼らない“涼”」を感じて学ぶ、今回の野の塾の会場は、三条通新町にある創建130年の、釜座町町家（ちょういえ）（写真上）です。会場を提供してくださったのは、京町家の保存再生に積極的に取り組まれている、特定非営利活動法人京町家再生研究会の方々です。

霧雨の降る中ではありましたが、30人が集まり、前栽（せんざい）を見下ろせる二階の座敷がいっぱいになりました。最初に、京町家再生研究会の方が、釜座町町家の再生過程を紹介してくださいました。その中で驚いたのは、「使える材料は再利用する」町家再生の精神です。解体した他の町家から、今では貴重なまぐろ石を寄贈されて前栽に彩りを添えたり、欄間（らんま）も、もともと使われていたものが利用されたり、目の行き届かないところにまでものを大事にする気持ちがつまっていました。

その後、環境心理行動学を専門とされる京都府立大学の松原斎樹教授（写真右）に、「視覚や聴覚が涼感にどのような影響を与えるか」というテーマでお話をいただきました。人間が感じる暑さ寒さの感覚は、実際の温度や、光・音といった単体の要素だけではなく、それらの組合せが空間全体の印象に与える影響を、総合的に考える必要があるそうです。

たとえば、前栽から聞こえる雨音や虫の声、雨や風の匂い、ほどよい距離で感じられる外の生活の様子、格子戸から差す外の光。さらに町屋では、はしりにわや前栽などの構造的な仕組みによって、風が生まれ、ゆらぎます。このように、自然と調和した空間全体の印象が、人間の五感に刺激を与えます。その刺激は、暑さ寒さの不快感を軽減するばかりでなく、疲労回復につながり、トータルで人間の快感度を高めることができるということを、実証実験の結果をもとに指摘いただきました。外と遮断され、エアコンのきいた空間ではなく、涼やかな手触りの敷物や日よけ、朝夕の打ち水など、小さな工夫の積み重なった空間にこそ、人間の本来感じる快感があるのではないか、と気づかされました。

### 町家の奥深さ

町家には、外から見ただけではわからない物理的、精神的な奥深さが感じられました。音、光、匂いに対する感覚を研ぎ澄ますことで、我慢することなく節電に取り組めます。さらには、雨、虫、通りの騒音、自然のものすべてを肯定的に受けとめる心のゆとりが生まれるのです。町家の精神に心打たれた一日でした。

（文／ニュースレター編集部　高椋 草美）

# 地球のなかま

日本人には馴染みの深い土用の丑が、
もうじきやってきます。
その食材には知らないことがいっぱいです。

## 第50回　ウナギ
## ―― 味は知っていても生態は知らない魚

文／ ニュースレター編集部　千葉 有紀子

### ●日本人にはお馴染み

ウナギといえば、焼く炭火から食べる器から何から何まで高級な鰻屋さんの蒲焼から、産地もわからないスーパーの真空パックの蒲焼まで。日本人にはお馴染みの食材です。土用の丑の前後ともなればいつもより高い値段でいつもよりたくさんの蒲焼が並びます。高値の天然物、それに続く養殖物に加え、最近は安い輸入物が並び、簡単に手に入れることができます。私は先日機内食（エコノミーです）でウナギが出てきてびっくりしたのですが、そんなウナギは実は絶滅危惧に近い種だということを知らない人は多いのではないでしょうか。

ヨーロッパではアリストテレスの時代に既にウナギの養殖施設があったくらい古くから食べられていましたが、日本も古墳からウナギの骨が発見されるくらい付き合いは長いのです。今のように蒲焼で食べられるようになったのは江戸時代からですが、すでに万葉集の中にウナギが精のつく食べ物として歌われています。

### ●ウナギには不思議がいっぱい

ウナギはウナギ目ウナギ科ウナギ属。近い種にはアナゴ科、ウツボ科、ウミヘビ科があります。ウナギはこれだけ食べられていながら、まだまだわからないことが多いのです。

産卵のシステムが解明されたのはごくごく最近のことです。ニホンウナギも、ヨーロッパウナギも大洋を何千キロも旅した後、遠い海域で産卵していることが分かりました。ウナギは、海で生まれ、稚魚のシラスウナギは、海から川に上り、川の生物を食べて10年前後で成熟します。ウナギはもともと大食いですが、産卵を控えてさらにたくさん食べて脂肪を蓄え、川を下り外洋に出ます。そうして自分が生まれた海域で産卵後、一生を終えます。ウナギの卵からの人工養殖は、まだ難しい点があり、現在は実験段階でまだ実用化には至っていません。

ウナギは減少しています。原因はまずは乱獲があげられます。稚魚が遡上するEU各国・日本・台湾・アメリカ・カナダなどの川で、シラスウナギが捕獲されて中国に送られ、安い経費で大きく育てられ、蒲焼に加工されます。それを日本が輸入しています。供給量が増えるほど販売単価は下がり、消費量は増えます。供給のためにシラスウナギの乱獲が激しくなります。

また、ウナギは海から川へ、また川から海へと、10年の時を経て移動するわけですが、その途中の河川改修や、河川・湖沼の水質汚染など、自然環境が大きく破壊されていることも要因の一つです。ウナギが棲息できるように、自然環境を回復する努力が必要です。

### ●さらにセシウム汚染まで

政府は今年6月7日、茨城県の霞ヶ浦や北浦、那珂川などで取れた天然ウナギから基準値を超える放射性セシウムが検出されたとして、出荷制限を指示しました。

5月10日に霞ヶ浦で取れたウナギから一キログラムあたり177ベクレル、同23日に那珂川の支流の沼で取れたウナギから110ベクレルの放射性セシウムが検出されました。食品に含まれる放射性セシウムの基準値は先月から厳しくなり、一般食品は一キログラムあたり100ベクレルとなっています。

霞ヶ浦一帯は、2010年に約14万トンを出荷した日本有数の天然ウナギの産地。この汚染はウナギだけにとどまってはいないでしょう。汚染の広がりを自覚する測定値となりました。

### ●そしてこれから

天然のウナギは日本中で広く生息しています。大きな産地でなくても、捕って食べるという事は古くからあり、今も続けられています。私は滋賀県高島市で、捕れたウナギがいけすにいるのを見て、その大きさにびっくりしたことがあります。養殖のウナギは何度かさばいたことがあったのですが、太さが全然違います。

高知の友人の話では、その人の実家ではウナギは買うものでなく、捕るものだと言います。前日に箱を沈めておけば、かならずかかります。かと言って年中捕るわけではなく、おいしくなる時期を見計らって捕るといいます。特にこれから、気温の上昇とともに増えてきて活動が活発になるプランクトンなどの微生物を大量に食べるウナギは、脂がのって最高においしいそうです。

今はウナギはほとんど年中買うことができます。資源として見直すまでもなく、なぜそんなに食べる必要があるのかという原点に帰るべきなのではないでしょうか。理にかなった旬のものを食べる暮らしこそが共存の道なのでしょう。

参考文献　『ウナギ―地球環境を語る魚―』井田徹治著
岩波書店　2007年

# みどりのかわらばん

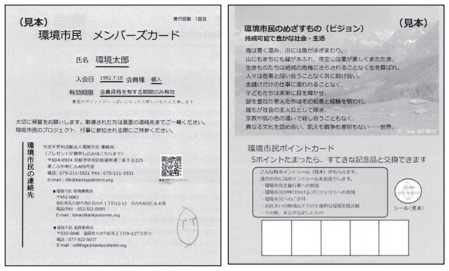
読者×読者、
読者×環境市民をつなぐ

## 私と環境市民

1994 年 6 月に入会しました。そのころは子育ての時期で小さな身体に影響する空気、食べ物、カラフルな薬、放射線など、将来にわたって受け継ぐあらゆるものに神経を尖らせ必死でした。

今は活動にあまり参加できず残念ですが、ニュースレターを読むだけでも「環境への正しい目」を持つことができ、感謝しています。入会当時に開催された行事で、環境市民の代表の方が今後の社会について声にならないような悲痛な声で話されていた情景が目に焼きついています。その後、3.11 の震災、そして原発事故はその声が現実になったものだと思います。これからも役立つ情報を発信する「正しい目」として、ご活躍をお祈りいたします。（文 / 本会会員 菊池 暁子）

## お知らせ　メンバーズカードをつくりました！




本会の、社会を変えるための活動づくりに、もっともっと会員のみなさんに参加いただき、みなさんの声を本会の社会的な影響力の向上につなげるため、「環境市民メンバーズカード」をつくり、5 月下旬にお届けしました。
当カードは、みなさんが本会会員であることの証明となるとともに、ポイントカードとしての機能ももっています。本会主催行事やプロジェクトへのご参加、ご寄付、みなさんご自身の環境実践活動をお知らせいただいたときなどに 1 ポイント差し上げます。5 ポイントたまったら、素敵な記念品と交換できます。

遠方にお住まいで、なかなか活動にご参加いただけなかった方も、インターネットなどを通じて気軽に参加できるプロジェクトも企画していきます。楽しみながら、当カードをお使いいただければうれしいです。

今後、会員のみなさんとのコミュニケーションの機会を増やしていきたいと考えています。当カードへのご意見を含め、会員として環境市民に期待すること、ご提案など、お気軽にお寄せいただければ幸いです。

## SKIPの！エコファイター劇場

vol.65

環境共育チームSKIPの環境プログラム「エコファイターショー」をモチーフとしています。

イラスト：かわみん

## インフォ@エコ

☘ 環境に関するオススメの本、映画、音楽などをご紹介します。

### 生きるということ

エーリッヒ・フロム著、佐野哲郎訳、1977年、紀伊國屋書店、（1,359円＋税）

本書は「持つ事」と「ある事」（原題 “TO HAVE OR TO BE ?”、1976 年）という二つの概念について、特に「ある事」の重要な側面にスポットを当てて、先進国に生きる現代人がどのような命題を抱えているか、について述べた古典的名著である。

フロムによると、消費する事は「持つ事」の一つの形態であるという。消費がさらなる所有、消費の対象を求める、という循環に陥る。ここには「取得→一時的所持と使用→放棄→新たな取得」という図式が成り立つ、という。

「持つ事」を当たり前としてきた社会では、人々はたとえ必要のない物であっても買い求め、結果として消費に固執するようになる。それにより他人との比較・競争が助長され、人間の考え方、働き方、生き方に歪みを生み出す。

一方、「ある事」は、何ものにも執着せず、束縛されず、変化を恐れず、絶えず成長することである。「ある事」を大切にする社会では、人々は物質的利益に重きを置かず、生存上の精神的安心感が保証され、人としてどうあるべきか、を常に意識する。このような社会には、家族や地域社会とどのように接するか、他者に寄り添う本当の豊かさと自然環境をどのような状態で次世代に引継ぐか、ということに心を砕く人々がいる。

日本社会は、戦後「持つ事」に傾注しすぎた。その結末がヒューマンエラーを引き金として発生した福島第一原発事故であろう。いまこそ、働く意味、生きる意味を省みるときだ。我々はもういい加減「持つ事」に見切りをつけ、「ある事」を大切にする生き方へ、パラダイムシフトを図らなければならない。それは「持続可能な社会」に繋がる第一歩であり、本書はその糸口としての光を失っておらず、まさにいま再読されるべきものだと思う。

（文 /（財）地域公共人材開発機構 西田 周平）

●みどりの特派員募集中!●　みなさんの近況をお知らせください……（MAIL）newsletter@kankyoshimin.org（FAX）075-211-3531
（郵送）〒604-0934 京都市中京区麩屋町通二条下る225第二ふや町ビル405号室NPO法人環境市民 みどりのニュースレター編集部 宛

# 環境市民

かんきょうしみんぶんのいち

★環境市民の会員を紹介します

## no.86 向井 弓子さん

京都府亀岡市在住。
環境活動を 20 年以上にわたって行う。

## いつか、亀岡に福島の子どもたちを招待したい！

### きっかけはチェルノブイリ

環境問題にかかわったきっかけは、1986年におきたチェルノブイリ事故だった。ショックを受けた向井さんは、近所の母親2人と一緒に3人で脱原発を考える亀岡の会を立ち上げた。ヨーロッパから輸入される、放射能汚染された食品への不安から、汚染食品を入関でストップする運動、原発の危険性を知らせる講座の開催、脱原発の署名集め、核燃料サイクルの工事の反対の物販販売、と活動に奔走した。「当時は仕事も子育てもしながらだから大変でした」と向井さん。「でも忙しいときの方がいろいろできるのよね」と実感がこもる。

7年前には、エコロジカルリレーションズ.inかめおか、通称エコリレーかめおかを立ち上げた。「反対運動はかかわりにくい人もいるので、いろんな人が参加しやすい活動をしたかったんです」。エコリレーかめおかでは、水問題や農業問題など幅広く環境問題を扱ったセミナーを行っている。そして、東京電力福島第一原発事故が3月11日に起きた。向井さんの活動は原発反対運動に一変した。

9月には原発の建設反対運動が続く、山口県祝島を描いた映画「祝の島」上映会を行った。映画を見た若いお母さんたちと一緒に、給食に使う食材の放射能の検査システム導入の請願を行い、先日、議会で導入されることが決まった。京都でも導入が決まったところはまだ少ない。また、他のNPOと協力し、子どもたちが古民家に合宿し、省エネライフを体験するようなプログラムも亀岡で行っている。「いつか、福島の子どもたちを呼びたいと思ってるんですよ」と向井さんは教えてくれた。

### 参加しやすさ一工夫

そして7月に2日間にわたって、京都大学原子炉実験所助教の小出裕章先生の講演会を舞鶴と亀岡で開催する。原発銀座、若狭に隣接する舞鶴、50キロ圏内に位置する京丹波、南丹、亀岡の人たちに原発の問題について考える機会を提供したい、と企画した。「原発を推進したい、と思う人にも来てほしい」と向井さん。これまでの経験から考えの違いによって意見さえ交わせない状況に数多く直面してきた。「いろんな考えの団体に関わってもらえるよう、個別の団体名をださずに今回は『小出裕章さんのお話を聴く会』の主催としました」。その結果、今までは難色を示していたある政党関係者が賛同してくれることにもつながったという。多くの人に来てもらいやすくするため「反対運動っぽさ」をなくす工夫もした。子どもが書いたイラストを使って、明るくポップにしあげた講演会のチラシ。一緒に活動している若いお母さんがデザインしたという。他地域でも開催するのは大変では？「舞鶴にも『舞鶴ピースプロジェクト』という団体を中心に一緒に開催するんです」。向井さんのネットワークは広い。

長年活動を続けてこられた向井さん。活動をはじめた当初と今とではずいぶん周りの反応も変わったという。政党にチラシを持っていっても、昔は脱原発に賛同する政治家はほとんどいなかったが、今は自民党にも、公明党にも脱原発派がいる。近所の人にも、「昔、向井さんが集めていた署名はこういう意味だったんやね」といわれるようになったという。

### 亀岡からチェンジ！

今は、原発問題で忙しい向井さんだが、本当はもっと環境問題を幅広く対象にする活動を展開したいと思っている。「原発問題はあくまで問題の一つ。いろんな枠を超えて、環境問題を解決していくにはどうしたらいいのか、模索していきたい」。フットワークのいい向井さん。きっとこれからも、いろんな人の思いをつないで、たくさんの変化を亀岡から起こしていくに違いない。

（文／ニュースレター編集部　有川 真理子）

**お知らせ**

**小出裕章さんのお話を聴く会**
**「未来に生きるこどもたちへ」**

●講師：京都大学原子炉実験所助教
小出裕章先生 ●日時：7月 15 日（日）
午後 1:30 開場　午後 2:00 開演
●場所：ガレリアかめおか2F 大広間
●参加費：500 円 18 歳未満無料
●主催：小出裕章さんのお話を聴く会
申込み / 問合せ：
0771-23-8423（向井）
0771-44-0053（三須磨）
0771-84-0959（菓歩菓歩）

### 編集後記

先月号、今月号と、締切に直前に原稿を書かなければならない立ち回りになってしまいました。いつも早めに早めにしようと、思っていても、できないのは私生活でも同じこと。日々反省してるつもりでもなかなか改善せず……まぁ、来月こそは！

（文／ニュースレター編集部　石田 浩基）


### 編集部（五十音順）

青木 健治　高橋 めぐみ
有川 真理子　高椋 草美
石田 浩基　鷹野 圭
尾添 麻美　武田 麻里
風岡 宗人　千葉 有紀子
衣川 正和　村田 諒平
久保 友美　和氣 未奈
坂部 安希　デザイン 下司 智子
角出 貴彦

地球を 地域を 生活を
持続可能な豊かさに

# 環境市民 20 周年記念寄付キャンペーン

3.11 の大震災にともなう東京電力福島第一原発の大事故は、今後絶対に繰り返してはいけない出来事であるとともに、これまでの原子力ムラと言われる政府、電力会社、大学、マスメディアなどの癒着と、生命と環境を軽視した実態があらわになりました。ただ、持続可能で豊かな社会構築には、脱原発やエネルギー転換だけでなく、より広く根源的な社会変革が必要です。

持続可能で豊かな社会の実現に向け、環境市民は次の 20 年に向けて " 飛躍 " しなければなりません。根源的な社会変革をすすめていく社会的影響力の獲得には、さらに多くの方からのご支援が必要です。ともに社会を変える主体者となりましょう。ぜひこの機会にご寄付をいただけますようお願いします。

ご寄付は、指定がない限り環境市民の活動全般に活用させていただきます。この活動に使ってほしい、というご希望がある場合は、ミッションの分野や活動名をお知らせください。

**お振込先**

**●郵便振替口座　01020-7-76578　（名義）環境市民**

**●京都中央信用金庫 御池支店　普通　0666071**
**特定非営利活動法人環境市民 代表理事 枚本育生**
トクヒ）カンキョウシミン　ダイヒョウリジ　スギモトイクオ）

※銀行振り込みの場合、ご連絡先の確認のため振込後に事務局までご一報いただけると幸いです。

**ラジオ番組　「環境市民のエコまちライフ」** 京都三条ラジオカフェ（79.7MHz）

**身近な話題から旬の話題まで環境の視点から情報発信**　●放送時間：毎週月曜午後 1:00 から 1:15（再放送は火曜朝 7:00 から）
インターネットでの試聴・ダウンロードはこちら→ URL: http://kankyoshiminradio.seesaa.net/

## 環境市民に入会しよう！

環境市民は、多くのボランティアと会員の皆さんの参加によって支えられています。
「持続可能で豊かな社会づくり」のために、ぜひ会員になって環境市民の活動を応援してください！

### 会員特典

□月刊会報誌「みどりのニュースレター」をお届けいたします。
□行事などの参加費を割引させていただきます。
□環境に関する様々な情報を得たり、また質問や相談ができます。

### 会費

| 種別 | 年会費 | 入会金 |
|---|---|---|
| 個人会員 | 4,000円 | 1,000円 |
| ペア会員 | 6,000円 | 2,000円 |
| シニア・学生会員 | 3,000円 | ー |
| ファミリー会員 | 8,000円 | 2,000円 |
| 助成会員 | 10,000円 | ー |
| 特別助成会員 | 50,000円 | ー |
| 終身会員 | 一括　80,000 円 | |
| 営利法人会員※ | 1口 50,000 円 | 50,000円 |
| 非営利法人会員※ | 1口 10,000 円 | 2,000円 |

※ 年会費は一口以上

### 会費の振込み方法

1）郵便振替振込用紙に、住所・氏名・電話番号・会員の種類・送金内容事項をご記入の上、「年会費＋入会金」をご入金ください。（※シニア・学生・助成・特別助成会員は入会金不要）

2）ご入金を確認後、最新のニュースレター、入会記念としてポストカードをお届けします。

### 寄付をする

住所・氏名・電話番号・寄付金額をご明記の上、下記の振込先へお振り込みください。

### 会費・寄付のお振込み先

**【郵便振替】　口座番号：01020-7-76578**
**加入者名：環境市民**


（発行）**特定非営利活動法人　環境市民**　（代表）枚本 育生　（発行人）堀 孝弘

**TEL：075-211-3521　IP 電話：050-3581-7492　FAX：075-211-3531**
E-mail：life@kankyoshimin.org　URL：http://www.kankyoshimin.org
〒604-0934　京都市中京区麩屋町通二条下る　第二ふや町ビル 405
（月から金午前 10:00 から午後 6:00）

**●環境市民 東海事務所**
TEL&FAX：052-521-0095
E-mail：tokai@kankyoshimin.org　URL：http://www.kankyoshimin.org /tokai/
〒451-0062　名古屋市西区花の木 1-12-12　AOI ビル 4 階

**●環境市民 滋賀事務所**
TEL：077-522-5837　E-mail：cefshiga@kankyoshimin.org
〒520-0046　大津市長等 2 丁目 9-12　竺 文彦気付

この印刷物は風力発電による自然エネルギーを使用して植物油インキで印刷しました。印刷：（有）糺書房



本誌の無断複写・複製・転載を禁じます。
「環境市民」登録商標 第4809505号


環境市民
Citizens Environmental Foundation